行 政 視 察 報 告 書

平成27年８月

月曜会・公明党会派

1　視察実施日

平成27年８月５日(水)から６日(木)まで

2　視察先

島根県鹿足郡津和野町

人口　　7,956人

山口県萩市

人口　　51,965人

3　調査事項

⑴　津和野町

①　Ｉターン、Ｕターン対策についての取組は

②　地域の人口減少対策について(人口流出の歯止めは)

③　地域の活性化、まちづくりをどのように図られているのか

④　観光事業(誘客)は人口減少対策にも関連してくると思われるがその取組は

⑵　萩市

①　吉田松陰先生のことば、朗唱など郷土の歴史を活かした記養育を行っていると聞くが、具体的にはどのような教育なのか

②　二分の一成人式の取組について

③　「志」シートの活用を通して、志を育てる教育を推進するとあるが具体的には

④　萩ふるさとターン応援団(定住支援)の取組について

⑤　市民(ＮＰＯ法人)との協働による図書館運営とはどのようなものか

4　参加者

月曜会	村井公平
〃	岩崎貞典
〃	宮﨑春貴
〃	浅田康子
〃	村岡栄紀
公明党	岡崎義樹
無会派	中川正則

所　感　　村　井　公　平

津和野町

平成17年９月に旧津和野町と旧日原町と合併して誕生した新津和野町は、山陰の小京都と言われ、文豪森鴎外の生誕地でもあり旧宅が国指定史跡となっております。又、津和野町庁舎をはじめ、国指定の有形文化財が多く残る町並みもあり、水質日本一と言われる清流高津川など豊かな自然と歴史的遺産や伝統文化を求めて日本だけでなく外国の多くの観光客が来られております。しかしながら、昭和54年をピークに観光客が年々減少しております。減少対策として色々と取組まれておりますが、特に平成27年４月24日に【津和野今昔　～百景図を歩く～】が日本遺産に認定されたので、これらを観光資源として観光事業、誘客に取組まれていくとのことでありました。西脇市においても交流人口増加策として観光資源の発掘や新たな取組が喫緊の課題と強く感じました。

次に、地方創生総合戦略でありますが、平成17年と平成27年の人口を比較しますと10年間で 1,559人の人口減少になっており、平成22年から定住対策として、若者定住促進奨励金、空き家情報バンク制度、無料職業紹介、定住フェア、婚活イベント等々の施策を実施されており平成22年から５年間でＵ・Ｉターン者数 135人の実績となっております。特筆すべきは、転入者で同居親族に小学生以下の子どもがいる、原則40歳未満の夫婦については新築住宅に月３万円の家賃で25年経過した世帯には、土地と建物を無償譲渡する制度があり話題になっております。検討する価値はあると思いました。又、津和野町には産婦人科の医療機関がなく町外の医療機関で受診しなければならないので妊産婦が通院のためタクシーを利用する場合に、その料金の一部を助成する制度を作っており、この点については西脇市民はありがたいと思いました。

最後に、多くの観光資源や街並みに残る文化遺産等々があるため観光誘客が活発に行われていることには勉強になりましたが、高齢化率が 44.6％にもなっており、次代を担う若者が少なくなっており西脇市の現状を重ね合わせ将来の行政運営が大変気にかかりました。

萩市

明治維新の礎を創った吉田松陰は、29歳の若さで亡くなったが、松陰の教えは塾生に大きな影響を与え多くの若者が改革を唱え立ち上がり明治維新へと繋がったと思う。改革を唱え立ち上がった若者の多くが新政府の要職につき明治政府をつくっていった。このことは、現在の萩市に活かされている。その一つが吉田松陰の言葉の朗唱であります。藩校明倫館を受継いだ明倫小学校では、小学１年生から６年生まで学年に合った言葉を毎日朗唱しており、市内小学校の半数が実施している。又、４年生以上の児童は松陰読本を活用した授業を受けている。これらによる効果について質問

を致しました。答えとしては、明倫小学校に学んだ卒業生として誇りを持ったことだとのことでした。又、明倫小学校では、10歳の４年生で二分の一成人式を参観日を利用して10歳としての自覚を促すため二分の一成人式が行われており、特色のある教育をされていると思った。これと併せ、特に感じたことは、昭和25年に知的障害の特殊学級の創設、昭和35年に肢体不自由の特殊学級の開設等、障害児教育の取組の速さには感心しました。明倫小学校は明治18年に建設された木造校舎で平成26年４月に新しい校舎を建設して移転しました。旧の木造校舎４棟は文化財として保存して行くとのことでありました。

今回の萩市の視察では時間も少なく多くは研修できませんでしたが、日本の中枢で活躍する人材が多く輩出されていることや、山口県では、小、中学校は35人学級にしているとのことでした。これらの事を考えると吉田松陰の教えが今も脈々と受け継がれていると強く感じました。西脇市も教育に重点を置いた政策の推進が不可欠であると思いこれからも教育の課題に取組んでまいりたいと思いました。

所　感　　岩　崎　貞　典

今回「山陰の小京都」と称される島根県西端にたたずむ小さな城下町津和野町を訪れた。調査事項は

① 観光事業誘致の取組について
② Ｕ、Ｉターン対策の効果について
③ 人口減少対策の成果について
④ 地域の活性化、まちづくりの取組について

以上４点について質疑、意見交換をさせて頂いた。

まず通された町役場はレトロな庁舎で大正８年の建築で、大変落ち着いた木のぬくもりのある会議室でした。島田副町長、沖田議長ほか暮らし推進課課長、係長、主事、又商工観光課課長、主事と議会事務局長と総勢８名で対応していただき懇親丁寧な説明を受け、温かいおもてなしに大変感謝申し上げます。

観光事業については昭和54年をピーク（ 152万人）に年々減少傾向にあるものの、それほどの落ち込みは無く平成21年までの30年間、 100万人台をキープしており根強い人気があったようです。しかしＨ25年の集中豪雨の影響により観光客が激減、おまけに全国で唯一ダムの無い川として有名な一級河川、高津川の鮎もぜんぜん取れなくなり、全国からの太公望も減ったと聞く。

そのような中「津和野今昔～百景図を歩く～」津和野町が日本遺産認定の申請が受理され文化庁より日本遺産に選定されました。地域の歴史的魅力や特色を通じてわが国の文化、伝統を語るストーリーを日本遺産に認定す

るとともに魅力ある有形、無形の文化財を地域が主体となって総合的に整備活用し、国内外に発信する事により地域の活性化を図るとされているようです。これを機に通過型観光地（主に広島方面）から滞在時間の延長を目指し観光誘客につなげたいという､また東京事務所にも窓口ＰＲとして、まずまずの効果が出てきていると聞く。さらに行政と地域が一帯となって津和野の魅力を分かってもらい、滞在時間を長くしてその周辺を散策すると結構みるところがあります。

外国の方からの評価も高く是非この機会に津和野にお越しくださいと努力されておられ、その成果が徐々に数字に表れているようです。H26年復興元年として頑張ってこられ80万人割れが今年は久々に 100万人に届きそうな勢い、行政と地域の連携と、努力、やる気　により明るい兆しが見えてきたようです。

定住対策としては、

１　若者定住促進奨励金
２　空き家バンク制度
３　無料職業紹介
４　就農研修
５　定住フェア
６　婚活イベント

各自治体はあらゆる対策を講じているが、津和野町には住むことの魅力を感じる事ができる良質な住環境・生活環境サービスを提供する事で、子育て世代の人口の増加及び定住化を図り、地域の活性化を推進する目的で居住して25年が経過した世帯には土地と建物を無償譲渡するという画期的な対策を打ち出した。毎月の家賃3万円で、間取りは複数のパターンから入居者が選定し建設する。

一年間５棟で５ヵ年の予定、入居者の資格条件としては40才未満の夫婦で小学生以下の子どもがいる家族となっている。一棟約 3,200万円（土地付）が 900万円で買えると言うことで大変な人気で、すでに予約待ちとのこと。

やはり定住対策は思い切った施策を打ち出さないと、なお事業費は過疎債を利用しているとのこと。

萩市においては

・ 松蔭先生の言葉の朗唱など郷土の歴史を活かした教育について
・ 二分の一成人式の取組内容について
・「志」シートの活用を通した教育の推進について

を調査内容として行政視察をした。萩市は人口約５万人、農業、漁業、観光が中心の城下町である。松下村塾をはじめとした萩の資産が近代化・工業化に果たした役割などが評価され世界遺産に登録された。

そのような中で松下村塾が「明治日本の産業革命遺産」である意義として、今なお松陰先生の言葉の朗唱や「松蔭読本」を活用した松陰先生の生き方や考え方を学ぶ松蔭学校は、「志」シートの活用を通して志を育てる教育を推進している。志シートは４年生に将来の夢を書いてもらって“「志」を立ててもって万事の源をなす”といった事を参観日に保護者の前で決意表明をさすといった教育をされている。又、二分の一成人式や立志式でも自分の志を発表している。さらに明倫小学校では毎朝松陰先生の言葉を朗唱し、各学年で学期ごとに決められた朗唱文に対して、学習面と生活面の自己目標を決めて自分の行動を見つめ正す実践をしている。

椿東小学校では松陰先生について学んだ後、松蔭神社で観光客にガイドを行っている。主に小学４年生が「松蔭読本」を活用して、総合的な学習の時間や道徳の時間に松陰先生の生き方や考え方を学んでいる。各学年３学期分の計18（６年間）を毎朝朗唱している。

例①１年生一学期“今日よりぞ幼心を打ち捨てて人と成りし道を踏めかし”
今までは親にすがり甘えていたが小学生となった今日からは自分のことは自分でし、友達と仲良くしよう

例②４年生“凡（およ）そ読書の功は昼夜を舎てず寸陰（すんいん）を惜しみて是を励むにあらざれば其の功を見ることなし”
読書の効果をあげようと思えば昼と夜の区別なくわずかの時間でも惜しんで一心に読書に励まなければ、その効果を見ることは出来ない。

以上のような朗唱教育、これだけの内容文を小学生の頃から習うということはこれからの長い人生にとって大変すばらしい事だと思う。これらをもとに当該学期の自己目標を設定しより高い自己実現へ向けての意欲化を図る。また早朝の朗唱により、心の安定をもち落ち着いた気持ちで学習へ取組む意欲を高める。

松蔭の生き方や言葉を自分の行動の判断基準の一つとして、生活する事を通して生きる力を育む。これらの事、毎朝声をそろえて行っている松陰先生の言葉の朗唱は多くの方々から注目されていることでしょう。

精神教育の一貫として教育活動全体の根底に位置付けていることに驚きと感動した視察であった。

所　感　　宮　﨑　春　貴

津和野町

津和野町では「人口減少問題にどう向き合うか」について視察を行なった。津和野町の人口の現状は2005年 9,515人、2010年 8,426人、2015年 7,956人となっている、将来人口の推計では2020年で 6,686人、2040年 3,957人、2060年では 2,222人との予想となっている。また、高齢化率は、平成17年度38.6％、平成22年度41.6％、平成27年度は44.6％となっている。そ

の様な中、津和野町では、目標を27年12月として、まち・ひと・しごと創生総合戦略を考えている。４つの分野を視点として地域の実情に応じた総合戦略としている。基本目標として、「しごとづくり」、「ひとの流れ」、「結婚・出産・子育て」、「まちづくり」の４つを目標としている。「しごとづくり」では、ＩＴ・企業誘致などがあり、１月に空き家を利用したＩＴ企業が進出している。「ひとの流れ」では移住・定住施策で若者定住促進奨励金、空き家情報バンク制度、無料職業紹介、定住フェアなどいろいろな施策があり、「結婚・出産・子育て」においては婚活、妊産婦支援（タクシー利用の料金の９割負担）などがある。

「まちづくり」は、まちづくり委員会への支援などの支援策がある。若者定住促進奨励金の交付件数及び交付額では、ふるさと就労、若者Ｕターン、若者転入、鯉・恋祝い金、出産祝い金など若者に的を絞った施策で、Ｈ22年度からＨ26年度までで件数としては 289件、合計20,550千円となっており一定の成果はあるように感じた。津和野は観光地でにぎわいもあると思っていたが実際訪れてみると現実は静かで不思議な思いをした。観光客も昭和52年にデスカバージャパンのコマーシャル、テレビの遠くへ行きたいなどの影響で最大 150万人が訪れてからは減少して平成26年度は81万人となってしまっている。今後ともきめ細やかな定住促進施策の更なる推進が必要ではないかと感じた。

萩市

萩市では市立明倫小学校において、松陰先生（萩市では吉田松陰を松陰先生と呼んでいる）のことばの朗唱など郷土の歴史を生かした教育について、二分の一成人式の取組について等の説明を受けた。まず、13代藩主毛利敬親が嘉永２年（1849）江向に15,000坪の明倫館建立している。明治18年（1885）市内４小学校を合併して明倫小学校となり、創立 131年となる。教育の基底として吉田松陰の教育精神の尊重をもとに個性の伸長、実際の行動に移すことの大切さ、動機付け、意欲付けの大切さを教えている。明倫小学校では、１年生から６年生までの毎学期、吉田松陰のことばを毎朝朗唱している。この朗唱は昭和56年から始まってねらいとしては、毎朝の朗唱により心の安定を図り、落ち着いた気持ちで学習に取組む態度を育てる。松陰先生の生き方に学び、自分もより高いめあてや目標、志をもってがんばろうとする意欲を高める。激動の時代を行きぬいた教育者、兵学者である先覚者吉田松陰に誇りをもち、郷土を愛する心を育てる。吉田松陰のことばや生き方を自分の行動の判断基準の一つとして生活する心や態度を育てる。と考えられている。また、「松陰先生のことば」を道徳の時間に取り上げまた４年生で配布される「松陰読本」を活用して、学習をおこなっている。子どもたちが将来生きていくうえで、さらに人生の壁にぶつかったときに、何らかの心のよりどころとなるものと考えられのではないか。

例として、1年生「今日よりぞ　幼　心を打ち捨てて　人と成りにし　道を踏めかし」
その他明倫小学校では、４年生の参観日の時に行う二分の一成人式や「志」シートを活用した教育の推進なぞ特色のある教育を行なっている。

所　感　　浅　田　康　子

８月５日
島根県津和野町
平成17年、旧津和野町と旧日原町が合併し新津和野町となる。西脇と同じく、ことしが合併10周年の年となります。
人口 8,000人程の小さなまちではあるが、昔から、山陰の小京都として有名です。
訪れたことがなくても、掘割に泳ぐ鯉や、ＳＬの走るまちとしてのイメージが浮かんできます。
また、明治の文豪、森　鴎外の生誕地としても知られています。
地名を聞いただけで､そのまちがイメージできるのは､おおきな強みです。
「西脇から来ました」「あぁ、西脇は〇〇で有名ですね」と、外から見て言ってもらえる西脇ブランドは何？と考えてしまいます。
今回、視察調査として取り上げた観光事業・誘客の取組について、観光課の藤山課長からくわしい説明を受けました。
観光客入込数集計表による観光客の動向は、昭和54年が 150万人余りと、現在までで最高の観光客となっています。
原因は、ディスカバージャパンの流れに乗ったこと、鯉が泳いでいる小さなまち、と雑誌に載ったことなどが要因と考えられています。
やはり、時のながれをいち早く把握して流れにのることや、マスコミに取り上げてもらえる、特徴あるまちになることだと思います。
平成25年は、79万人と落ち込んだのは、山陰地方が大きな災害に見舞われたからと原因は把握されています。また、毎年１月に20万人以上の人が訪れるのは、日本五大神社があり初詣で賑わうとのこと。とすれば西脇にも由緒ある神社・仏閣があります、学問や安産祈願に詣でてもらえる処として、発信していくことが将来、観光事業につながり、誘客の増加につながる一案だと思います。

８月６日
山口県萩市
平成17年３月に１市２町４村の合併で新市、萩市となる。
萩市は城下町として、 400年余りの歴史あるまちで、まち全体から歴史・文化を肌で感じることができます。今回、訪問した明倫小学校では、吉田

松陰先生の教えを今もなおこどもたちに継承して、学習に取り入れ、毎朝、朗唱されています。ビデオでその様子を見ましたが、「温故知新」ということばが浮かんできました。学力向上プランの推進として毎朝、松蔭先生のことばを朗唱することで、生き方や道徳を学び、より高い自己実現への意欲を高める、とのこと、朗唱することにより心の安定を図り、落ち着いた気持ちで学習に取組むことが出来ると言われることに納得できました。明倫小学校の生徒の毎日の暮らしぶりが浮かんできます。校長先生も言われていましたが、子供たちは、今は意味を深く理解できなくても、大人になってから役に立つ時がきっとくると話しておられました。朗唱するときには、大きな口をあけて、正しい身なりで、正しい姿勢でと指導されています。
こうしたことが、授業中の態度や、大きな声で発表する力になると思いました。
また、二分の一成人式では、４年生の生徒が松蔭先生のことばと自分の思いを「志」シートに書くという取組をされています。実際に書かれた文章を見せていただきました。しっかりと自分の考えや将来の希望などが書かれており立派な10歳に感心しました。
そして、その志シートを参観日に親の前で読み上げるのだそうです。こうした取組が親と子をつなぐ教育だと感じました。二分の一成人式は、10歳の決意を表すよい機会だと思います。
まだ10歳、されど10歳。いろいろと考える年齢だと思います。
歴史上の大きな存在の人物の教えを守り、引き継いでいくのは、苦労もあると思いますが、それを誇りにし、学習に取り入れている明倫小学校に、ガンとして動かない強さを感じました。
歴史あるものは古いものです。それを古いものとしてだけとらえるのか、大切につないでいくかはその土地の人の心ひとつだと思います。

２日間にわたり、津和野町と萩市を訪問してきました。両市町とも歴史あるまちです。
守りつづける苦労も多々あるとは思いますが、観光や誘客のためには、大きな財産であると思います。

所　感　　村　岡　栄　紀

＜島根県　津和野町＞

島根県津和野町は、平成17年に旧津和野町と旧日原町が合併した町です。私自身、津和野は子どものころから「萩・津和野」と一対といったイメージで知っていましたが、実際に津和野町に行くのは初めてでした。視察目的は「観光事業、誘客の取組について」「人口減少対策について」という

項目を中心に担当者による説明&質疑、意見交換が行われました。
津和野町は２年前の７月28日に未曾有の豪雨災害に遭われ、北部地域が壊滅的な状況になっており、現在も復旧の最中だそうですが、夏のシンボルであるＳＬの復活、ＪＲ山口線の全線開通により、少しずつ活気を取り戻しつつあるとのことでした。
まず津和野の観光客数ですが、最大のピーク時が昭和54年の 152万人。このころは、ディスカバージャパンを合言葉に、「新日本紀行」「遠くに行きたい」などのテレビ番組で町が紹介されたり、映画「男はつらいよ」のロケ地になったりと、一種のブームのような状況であり、修学旅行などの団体客が貸自転車でぶつかりそうになりながら、津和野の町を観光するといった活況ぶりであったようです。しかしそのブームも過ぎ去り、観光客も団体客を中心に一転減少に転じ、未曾有の豪雨災害があった平成25年には過去最低の78万６千人まで落ち込み、その後、１年でＪＲ山口線が復旧、現在は町を上げて観光客の増に取り組まれています。
津和野町は「山陰の小京都」と称され、観光客が減少したとはいえ、100万人の観光地であります。しかし、この 100万人という数字には「なごみ温泉」や日原地区にある「道の駅」への訪問者も含まれているということで、実際にはかなり「集客」に苦戦されているようです。
ここでの特筆事項としては「観光客入込数」に対する「宿泊客数」の割合が、３％を切るくらいに少ない「通過型観光」になってしまっている点であります。最近ではＪＲ新山口駅を出発したＳＬ列車が、津和野に到着し、駅に降りるとバスが待っており、わずかの時間だけ津和野で有名な「殿町の鯉」を見るだけで、観光客はすぐにバスに飛び乗って、広島県の宮島に向かうといったパターンが増えており、滞在時間の短さにより、津和野町での観光客による食事や、土産等の購買が増えないといった状況になっているということです。
さらに、最近のバスの運行規制により、１人の運転手で走れる距離が規制されたことにより、どうしても地理的にアクセスしにくい津和野町は避けられがちになり、団体客の減という問題も抱えています。また４年連続水質日本一の高津川では、鮎釣り客でにぎわっていましたが、ここ２年ほど鮎がまったく時期に漁れないといった危機的な状況になっており、この点でも、まさに悪循環スパイラルといった様相を呈しているようです。
しかし、こういった悪条件が重なりあっている津和野町ですが、津和野町の取組として、個人客を呼び戻し、いかに滞在時間を伸ばしていくのかを課題に、色々な誘客の取組がなされています。取組のメインとして、平成27年４月24日に、津和野町が日本遺産認定の申請をしていた≪津和野今昔~百景図を歩く~≫が「日本遺産」に認定されたことです。「日本遺産」とは、文化庁により平成27年度より創設された新しい文化財制度で、“地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」に認定するとともに、ストーリーを語る上で不可欠な魅力あ

る有形・無形の文化財群を地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内外に戦略的に発信することにより、地域の活性化を図る。”とされているものです。

津和野百景図に描かれている対象は、旧津和野藩全域に広がっていますが、大半が津和野城を中心として南北約３キロ、東西約 1.5キロ四方に集中しており、そこには津和野出身の偉人である、森鴎外や西周が幼少のころ、道すがらに見てきた風景がそのまま残っており、観光に来られたお客さんに、絵を見て、当時の様子も同時に感じてもらいながら、ゆっくりと歩いてもらう。ゆっくり歩いてもらうことによって、滞在時間を伸ばしてもらう。そして、宿泊してもらう。津和野百景図の風景は春夏秋冬により美しく変化するということを、季節折々の料理とコラボさせて一緒にＰＲすることにより、リーピートを促すといった工夫もされています。余談ではありますが、ガイドさんが観光客を「役場」に案内するという、津和野町役場の庁舎の建物も百景のひとつです。

また、津和野町は空き家が増え続けており、その有効活用＆誘客との取組として、町が町屋を借り受け、リノベーションすることにより、観光客の宿泊用の宿として活用されています。写真でビフォー・アフターを見ただけですが、京都の町屋が見事に復元された感じで、ここに宿泊して、ゆっくりと津和野の町を観光している旅人の姿を想像してしまいました。現在の宿の定員は５名ということですが、今後の空き家の有効活用の展開が興味深いです。

また、町の観光の火を消さないための取組として、撤退を表明をしていた津和野駅前のタクシー会社の事業の、事務所・車庫・車両などの資産部分を第３セクターが保有し、民間事業者がその資産を借り受け、タクシー事業を行う、上下分離方式という形で存続させるといった、懸命の努力もされています。

このように観光事業、誘客の面においては、一度は衰退した津和野町ですが、「山陰の小京都」と呼ばれる、町の歴史・文化といった強みを活用して、個人客を中心に呼び戻し、滞在時間を延ばすといった誘客に対する取組は、知名度や地域性、歴史・文化などにおいては、まったく状況の違う西脇においても、大いに参考にすべきであり、西脇においても、どこの地域にもない強みを、今後、もっともっと探求する必要があると感じました。

次に、津和野町の人口減少対策についてですが、津和野町の人口動向は、2005年 9,515人だった人口が2015年には 7,956人になっています。人口減少率は11.4％で島根県ワーストワンであり、将来人口の推計によると、20代から30代の女性が減ってくることに加え、社会減がずば抜けて高くなる地域とされています。つまり転入を転出が大きく上回るといった事態の中、2060年には75％減の 2,222人と予測されており、この数値は島根県ではもちろんワースト１ですが、中国地方でもワースト２という、非常に厳しい

数字が出ています。

そのような状況下において、「人口減少とどう向き合うか」をテーマに、津和野町まち・ひと・しごと創生総合戦略（2015~2019）が計画中であり、基本目標は、「しごとづくり」「ひとの流れ」「まちづくり」「結婚・出産・子育て」の４項目を基本目標に掲げています。

特筆事項として、「しごとづくり」に関しては、ＩＴ・企業誘致などを主な施策としており、実績としては大阪のＩＴ企業が、津和野町の空き店舗を購入して進出。雇用数は５名ということですが、わずか５名でありながら、ＩＴ特有のスキルの問題等で地元雇用はなかなか厳しいものであったようです。また、東京のＩＴ企業が津和野町の公的施設を活用して、コールセンターとして進出。このコールセンターには30人の雇用が発生したということであり、空き家活用の取組として、今後の津和野町の取組動向に注目したいと思います。

「ひとの流れ」「まちづくり」に関しては、移住・定住施策として、“つわの暮らし推進住宅事業”を進めておられます。この事業の目的は、津和野町に住むことの魅力を感じることができる良質な住環境・生活環境サービスを提供することで、子育て世代の人口の増加及び定住化を図り、地域の活性化を推進するもので、住宅の建設用地に関しては、少子高齢化等による地域の課題を解決するため、公民館区等の連携している地域で、自治会や町内会、住民活動団体で構成する「まちづくり委員会」との連携を重視し、まちづくり委員会の地域要望に基づいて建設候補地の選定を行っています。５年計画で25棟を建てる計画で、現在５棟が建築され、遠くは兵庫県から、近くは益田市からと、応募の倍率も高く、なかなか好評のようです。間取りはいわゆる“売り立て方式”であり、居住してから25年が経過した世帯には、土地と建物を無償で譲渡するといった特典も人気の要因なのだと思います。

「結婚・出産・子育て」に関しては、妊産婦通院サポート事業として津和野町に在住する妊産婦が、通院のためタクシーを利用する場合に、その料金の一部を助成するという制度があり、助成額は、タクシー利用券１枚につき、タクシー料金の９割に相当する額とし、タクシー利用券は、１人４枚が交付され、助成限度額は、１枚につき、18,000円というものです。津和野町には病院がなく、車で１時間は十分にかかる益田市や山口県に行かなければならず、それに配慮した制度であります。

以上、津和野町の人口減少に向けた取組の一部を学ばせていただきました。津和野町は、言いかたは良くないかもしれませんが、人口減少先進地であると思います。人口が増え続けてきた時代の日本は、東京などの大都市をある意味目標にすることで繁栄してきましたが、今後人口減少社会においては、津和野町のような人口減少先進地からしっかりと学び、自分の住む地域にあった施策を、しっかりと、かつ、大胆に成し遂げる自治体にならなければならないということを痛感しました。

＜山口県　萩市＞

山口県萩市は10年前に１市２町が合併した人口５万１千人の市です。萩市と言えばもちろん「松陰先生」。吉田松陰は私の最も尊敬する人物のひとりであり、幕末の激動の時代の中、二十一回猛士を貫いた松陰先生の生き方にあこがれ、松陰先生の「志」を引き継いだ高杉晋作や久坂玄瑞に魅かれ、そんな彼らの足跡を訪ねて、個人的にもこれまでに２回、萩を訪れたことがあります。

今回の視察目的は「松陰先生のことばの朗唱など郷土の歴史を生かした教育について」「二分の一成人式の取組内容について」「『志』シートの活用を通した教育の推進について」ということでした。視察会場は萩市立明倫小学校で行われました。明倫小学校は、旧藩校「明倫館」の跡地に建てられています。藩校明倫館は、1718年に今とは別の場所に建てられていたのですが、13代藩主毛利敬親により1849年15,000坪の敷地である現在の場所に建立されました。

明倫小学校は、その敷地内に昭和10年10月10日に４棟の校舎として建てられ、80年近くたった１年前に、同じ敷地内にあった県立萩商業高校の校舎に移転しています。萩小学校（旧萩商業高校）の校舎は３棟建てで、３つの棟の正面の１棟は新校舎に建替えられ、残りの２棟は耐震基準を満たしていたということで、現況有姿で譲り受けた建物を、小学生が使いやすいようにリフォーム等して活用されています。昭和10年に建てられた旧校舎は、そのまま保存される予定であり、本年９月から４棟のうち２棟を改修工事する予定であるということです。

明倫小学校は児童数 670人の県下で20番の大きさの小学校です。 670人といえばかなりの人数のようですが、平成15年には 930人、また昭和33年には 3,000人もの児童が在籍していたということで、ここでも少子化の影響が進んでいるようです。学級数は普通学級22の他に、特別支援学級が５クラスあります。明倫小学校は特別支援教育に非常に積極的であり、特別支援学級５クラスの内訳は、肢体、知的、難聴がそれぞれ１クラス、情緒が２クラスという４種の種別があり、ほとんどマンツーマンに近い状態で授業が行われています。また、音に敏感な子どもに配慮して、テニスボールをイスの４カ所の底の部分に装着することにより、音を立てない工夫をしたり、子どもたちが落ち着いて学習できるようにするため、教室内での掲示等をあまりしないようにしたりと、様々な取組により特別支援教育の拠点校としての評価も得られているようです。

明倫小学校の教育の根底にあるのは、藩校明倫館の学風であった「成徳達材」＝心を育て才能を伸ばすこと。そして、松陰先生の教育精神の尊重、いわゆる「至誠」ということを根底に、一人一人の才能を伸ばすこと、実際に行動に移すことの大切さ、動機付け、意欲付けの大切さといった、藩校明倫館と松陰先生の教えの２本柱で行われています。

私のこれまでの意識の中では、幕末当時、上級武士の子息しか通えない藩校明倫館と､身分の分け隔てなく誰もが学問に参加できる松下村塾とは、相反する存在であり、高杉晋作などは上級武士の家に生まれ、明倫館に通っていたものの、そこでの学問がつまらないと言って飛び出し、松下村塾の門をたたいたと聞いていたので、明倫館のことは、何となく堅苦しい教育のイメージしか頭になかったのですが、現在このような形で、両方の良さを引き出す教育が後世に引き継がれていることを知り、時の流れを経た歴史のいたずらに、ちょっとした感動を覚えました。

明倫小学校では朝８時20分から「松陰先生のことばの朗唱」が始まります。全学級の子どもたちが大きな口をあけて、正しい身なりで、正しい姿勢で、イスを机の下に入れて、指先を伸ばし、つま先を広げて、「松陰先生のことば」を朗唱している場面は、校長先生をはじめ、先生方も身が引き締まり、背筋の伸びる思いがするそうです。

この朗唱には４つの目標があります。１．毎朝の朗唱により、心の安定を図り、落ち着いた気持ちで学習に取組む態度を育てる。２．松陰先生の生き方に学び、自分より高いめあてや目標、志を持って頑張ろうとする意欲を高める。３．激動の時代を生きぬいた教育者、兵学者である先覚者吉田松陰先生に誇りを持ち、郷土を愛する心を育てる。４．松陰先生のことばや生き方を自分の行動の判断基準の一つとして生活する心や態度を育てる。

朗唱する「松陰先生のことば」は18文と決まっているようで、１学期に一つずつ、６年間で18のことばを朗唱することになります。また18の朗唱文は１年生から６年生まで、各学年ごとの水準に合わせて段階的に、また「道徳」の項目とも照らし合わせて決められています。

この朗唱の継続というのは非常に効果的だと感じます。現在でも自己啓発において「アファメーション」と呼ばれるものがあります。具体的には「～したい」「こうなれば良いなあ」という願望を「～なっている。」と肯定的な断定をして繰り返し唱えることで、潜在意識に働きかけ、変化や成長が遠くの未来にあるものではなく「今ここにあるのだ」という現実を作り出すことにより、自己実現を達成すると言われているものです。朗唱はアファメーションとは多少ニュアンスは違うかもしれませんが、この一見アナログ的に見える朗唱という取組が、子どもたちの自己実現に大きくつながるものであると私は思います。

また明倫小学校では「松陰先生のことば」の朗唱の他に、「明倫小学校のＡＢＣの実践」というチャレンジ目標を立てています。チャレンジ目標Ａは、あいさつのＡです。相手より先に明るく元気にあいさつすることです。７ｍ手前からあいさつをするということを目標にしています。また、丁寧なあいさつをしようということで、「７ｍあいさつ」に、さらに相手の方とすれ違う時に、「おじぎをしよう」という「２段階あいさつ」も始められています。チャレンジ目標Ｂはビューティフル。美しい心　いじめ

を絶対にしない、美しい環境　履物をそろえる　花壇の世話をする。チャレンジ目標Ｃはチャレンジ。一人一人が具体的な目標を持つ、学習、生活、読書、地域の行事に参加するチャレンジ。

この「明倫小学校のＡＢＣの実践」は、「松陰先生のことば」とリンクさせるように組み込まれています。いくら松陰先生のことばを朗唱しても、子どもたちが実際に学校の場面で自分の生き方を考え、実践しなければ意味がないといった趣旨のもと、ＡＢＣを実践することを目標としています。目標はごくシンプルな内容ですが、この“当たり前のことを当たり前にする”いわゆる凡事徹底ということを非常に大切にしておられます。これは「明倫の風」と呼ばれている、校長先生から子供たちに向けた“校長室だより”で、何度も何度も繰り返し述べられています。当たり前のことを当たり前に、そして継続。誰にもできることを、誰にもできないくらい頑張る。素晴らしいことだと思います。

その他として、10歳である４年生に学年を対象に、二分の一成人式が行われます。これは参観日の授業等を活用して、子供たちが「志」シートに自分自身の決意を書き、きちんとした場で、保護者の前で決意表明をするというものです。また、そこには子どもたちの合唱が入ったり、担任の先生が保護者から預かった“子どもたちへ向けた手紙”を読み上げたりするようなこともあるようです。

最後に、明倫小学校と地域との関わりですが、明倫小学校は長門、萩地区で一番大きい小学校であり、子どもたちは歴史と伝統のある明倫小学校で学んでいることに、誇りと自信を持っています。また、子どもたちのお父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんなど、明倫小学校の卒業生も、この明倫小学校を卒業したということに、大きな誇りを感じておられます。そのような母校愛に満ちた地域風土の中、地域とともにある学校を目指してコミュニティ・スクールへの取組が推進されています。

基本的な考え方としては、地域の学校として充実したものにするために、教職員だけが学校を運営するのではなく、保護者や地域の皆さんの声を聞き、一緒に学校教育に協力してもらうといった方針のもと、毛利元就にちなみ三矢会（さんしかい）と称して、「学校」「家庭」「地域」が連携して学校を支援していく、取組に力を入れておられます。

“学校が元気でないと地域が元気にならない”“子どもたちが元気なあいさつをすることが地域貢献である”ということを合言葉に、三本の矢が連携して、明倫小学校の子どもたちを育てていこうとされておられます。学校支援の登録者数は現在50名くらいおられます。校長先生のお話では、これからも地域の方にお願いして登録者を増やし、「成徳達材」と「至誠」を大目標に、さらなる１歩を踏み出していきたいと力強く語られました。

校長先生が何度も述べられた、「子どもたちが、当たり前のことが当たり前に、そして自然にできる人になってほしい。」ということば。時代をタイムスリップして、学校教育の原点を松陰先生に教えられたような・・

そんな気がしました。そして、誰もが教え学びあうことが普通に行われるようになれば、教育を学校だけでなく、地域コミュニティ全体で、当たり前に行うようになったら、日本の教育の歴史において、きっと新しいページを開くことになる。そんなことを実感・確信した、実り多い視察でした。

所　感　　岡　崎　義　樹

今回は、島根県鹿足郡津和野町と山口県萩市を視察しました。

まず、津和野町では、観光事業、誘客の取組・ＵＩターン対策の効果・人口減少対策・地域の活性化のまちづくりについて調査しました。

観光事業、誘客の取組については、豊かな自然や歴史的文化遺産に恵まれた町として、年間 130万人に観光客が訪れています。城下町として幻想的な町並みや殿町の堀割に住む鯉や蒸気機関車など情緒あふれる景観は、日本の歴史的風土 100選にも選ばれるなど高い評価を得ています。そうした中で平成20年ごろから年々減少気味の観光客であったが、平成25年７月28日の豪雨災害によって、観光客が更なる激減となりました。津和野町では平成24年に観光計画を策定し、団体バス旅行から個人旅行へ的を絞り、旅行者自身が観光内容のリサーチして行動できるなど、旅行者のニーズにマッチした内容を取り組んでいます。観光の大きな魅力である観光資源では、①指定文化財②神社・仏閣③西洋文化施設④資料館・美術館⑤自然⑥レクリエーション⑦町内観光⑧道の駅⑨イベント・企画⑩観光の担い手・人材⑪特産品と食文化に分類されていました。

また、観光アシストとして、ボランティアによりガイドや端末機を貸し出しをして、名所や旧跡などに近づくだけで自動的にガイドをするなどを行っていました。本年４月には日本遺産の認定されたことで観光客が増える事を願っているそうです。西脇市としても、観光ＰＲとしても、多くの公開情報やＱＲコードを使い、携帯電話やスマートフォン向けとして活用してもいいのではないかと思います。

津和野町定住促進対策については、将来を担う若者等の地元定住を促進し、活力に満ちたまちづくりとして、若者定住促進奨励金の事業があります。津和野町に家族を有する新規学卒者が定住する意思をもって就職した場合に５万円を奨励する故郷奨励金、15歳から40歳以下で従来津和野町住民が帰った場合や津和野町以外からの転入者への奨励金として、単身者には５万円、配偶者、家族１名に付き２万５千円であるＵターン奨励金と転入奨励金があります。津和野町の人口の推移から少子高齢化に伴ない、年々減少しておりますが、年間40人前後がＵＩターンされていました。空き家対策では、空き家情報バンク制度として、定住希望者に町内の空き家を紹介し、定住者の増加を促進しています。
その中で空き家改修補助金では改修費の １／２を助成（上限50万円）、

ＣＡＴＶ加入負担金を全額免除（46,200円）、
空き家確保支援事業補助金では、空き家活用調査や所有者との交渉等をした自治会の活動費（１件／２万円）を補助、
　空き家活用助成事業補助金では、残存か財投の処分費の　１／２を助成（上限５万円）を行っていますが、年々増加傾向でした。また、つわの暮らし推進住宅整備事業では、住むことの魅力を感じる事ができる良質な住環境・生活環境サービスの提供し、子育て世代の人口増加や定住を図り、地域の活性化を推進しています。入居者は、住民登録者、小学生以下の子どもがいる40歳未満の夫婦、自治会組織に加入し、地域活動に積極的に参加できる者等、家賃も月額３万円で入居できる施設を現在５棟提供していました。今後は西脇市としても、空き家の改修費など自治会との交渉窓口として検討していく必要があるでしょう。
　次に、山口県萩市では、松陰先生のことばの朗唱など郷土の歴史を生かした教育、二分の一成人式の取組、「志」シートの活用した教育の推進として、萩市立明倫小学校の取組んでいる教育についてを調査しました。明倫小学校では、松陰先生の教えや生き方を学び、より高い自己実現への意欲を高めるために、松陰先生の残された詩文である18文を朝８時20分から朗唱しています。その朗唱文は各学年の学期ごとに決めています。また萩市では４年生以上になると「松陰読本」を活用し、松陰先生の生き方や考え方を学んでいます。さらに「志」シートを活用し、10歳をお祝いして､全校生徒と保護者で二分の一成人式を開催しています。そして４年生の子どもたちに松陰先生の「志を立てて、もって万事の源となす」の言葉にあるように、人のため、社会のために何をすればよいか目標を立てて、一人一人が自分の志を堂々とみんなの前で発表する場を設けています。西脇市でも、二分の一成人式や「志」シートの活用した教育の推進など､特色のある萩市の施策を学んでもいいかと思います。

所　感　　中　川　正　則

津和野町
１　観光事業、誘客の取組について
　今年（平成27年）の四月に、申請提出されていた『津和野今昔～百景図を歩く～』が日本遺産として認定された。幕末の津和野藩の風景等を記録した「津和野百景図」には藩内の名所から風俗や人情までが絵画と解説が百枚描かれている。明治以降、新しい風潮に流されずに古き良き伝統を継承してきた住民の努力が、図に描かれた当時の様子と現在の様子を対比しながら町を散策出来ることが、観光地としての大きな武器になると思う。
　年間来客数の統計の中で、一月が二十万人～四十万人と突出している。ほとんどが太皷谷稲成神社（日本五大稲成）の初もうで客であり、正月三

が日の天気で年間来客数が大きく変化するらしい。
上下分離方式によるタクシー事業の運営。一般乗用旅客自動車運送事業と一般乗合旅客自動車運送事業を展開することにより、通院や買い物などの日常生活の移動手段の確保と観光振興がはかられる。事務所、車両などの資産部分は第三セクター（株式会社津和野）とし民間業者がその資産を借り受け、タクシー事業を行う方式。どうしてもタクシーは必要であることから、国内でも例のない方式を採用されている。町持ち出し額 3,820万円。

２　人口減少対策の効果
妊産婦の通院のためのタクシー利用について町内から医療機関までの移動料金の助成制度を設けている。利用料金の９／10に相当する額をタクシー事業者に支払う。一人四枚として交付し、助成限度額は一枚18,000円。住み易さへの配慮が見えてくる。

３　ＵＩターン対策の効果について
入居希望者の希望により、間取り等を複数のパターンから選択し建設する。25年間居住し施設を維持管理し家賃を町に納付すると、入居者に土地と建物が無償譲渡される。新しい形の戸建て町営住宅となっている。入居対象者は原則、同居家族に小学生以下の子どもがいる40歳未満の夫婦。建物（95.5平米）に選択肢があり、宅地（ 400平米）に余裕があることから、車庫等の増設が可能なことから魅力を感じる。家賃30,000円月額。

４　地域の活性化、まちづくりの活性化について。
これまでに３年間地域提案型助成事業を実施された地区からの事業評価のなかに、各自治会等では地域課題解決の意識が徐々に育ってきている。地域活性化に向け行政と住民が一体となるような施策を望むなど、後期事業に前向きな意見が出ている。

萩市
１　松陰先生（吉田松陰）のことばの朗唱など郷土の歴史を生かした教育について
明倫小学校は、明治18年に10校あった小学校を数次にわたって合併し藩校明倫館跡地に開校された。隣接する旧萩商業高等学校の校舎新築、移転に伴い平成26年四月から78年間にわたる木造校舎から旧商業高校を改修、一部新築なった現校舎へ移転された。旧木造校舎の本館は国指定：登録文化財第一号となっている。全４棟の校舎を現在改修中保存に向けた作業が進められている。
昭和57年度から現行の朗唱文が完成､本格的な朗唱教育に取り組まれる。１年生から６年生までの学期ごとに計18の朗唱文が「松陰先生の言葉」と

して教室に掲げられている。小学校学習指導要綱「道徳」の内容項目に対応した文書が選ばれており、当該学期の自己目標を設定し、より高い自己表現へ向けての意欲化を図る。と学校要覧に記載されている。１年生１学期の言葉は「今日よりぞ　幼心を打ち捨てて　人と成りにし　道を踏めかし」（今までは、親にすがり甘えていたが、小学生となった今日からは、自分のことは自分でし、友達と仲良くしよう。）　これから字を覚えていく１年生に意味が解るのか疑問に思えたが、毎朝の繰り返し朗唱により暗唱できるようになり、記憶の中に残っていくものらしい。

２　空き家バンクの制度化

平成18年度から事業実施。

27年度から萩暮らし応援事業の開始：中学生以下の子供を有する世帯又は世帯主の年齢が39歳以下のＵＩＪターン世帯が、萩市空き家情報バンク制度に登録された物件を購入、賃貸した場合、改修費又は家賃費用の一部を支援する。

改修費：対象経費の３分の２以内（ 200万円上限）

家賃費用：費用の２分の１以内（１万円上限）

制度運営上の課題、問題点

〇登録物件の充実

・家賃が安価な賃貸物件の充実：　移住希望者は賃貸物件を求める方が多いが所有者は物件の売却を希望する場合が多い。

・状態が良好な空き家物件の充実：　管理不全な状態の空き家を登録希望されることもあり、物件の状態が良好なうちに提供頂ける仕組み作りが求められる。

〇登録物件の維持管理

登録期間が長い物件には老朽化が目立つものや適正な維持管理がされていない物件がある。

〇賃貸住宅における家賃の滞納

〇賃貸住宅における入退去時の確認

以上西脇市で検討されている「空き家バンクの条例」を考えるときに、参考にしたい。